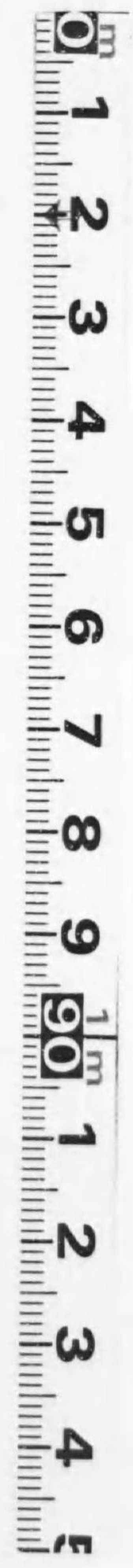
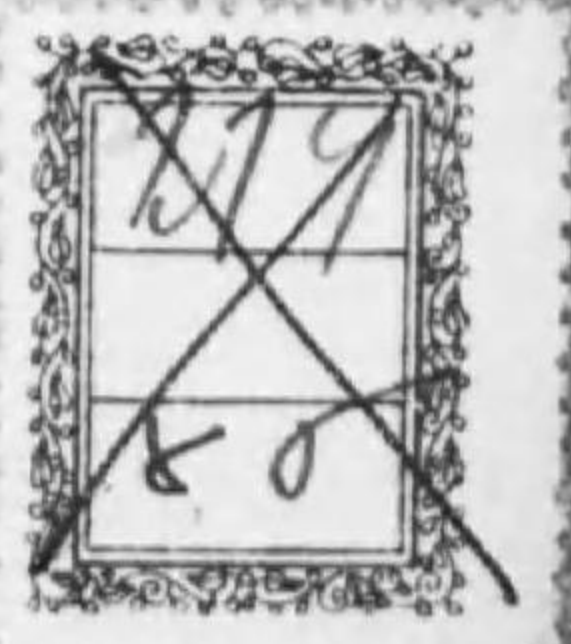


特113  
241

院長 長又義雅先生述

最新結核及脚氣  
血清療法說明書

共愛病院藏版



始



特  
24



最新結核及脚氣  
血清療法說明書

大正  
6. 6. 22  
内交

# 最新結核及脚氣血清療法説明書目次

## 甲、結核血清療法

第一	結核菌及結核体質	一
第二	結核の豫防	四
第三	結核は全治するや否や	七
第四	結核の療法	一〇
第五	結核血清は何回注射すれば足るや	二
第六	結核免疫とは何か	三
第七	慢性肋膜炎腹膜炎等に對する血清の効力	四
第八	治療實例	六

其の一 結核性腹膜炎



其の二 急性結核性腹膜炎及肋膜炎……………一八

其の三 結核性腹膜炎(慢性)……………一八

其の四 肺結核……………一九

其の五 肺炎加答兒……………二〇

其の六 肺結核……………二〇

其の七 結核性肋膜炎……………二二

其の八 肺結核……………二二

其の九 腸結核、右肺加答兒……………二三

其の十 肺結核……………二三

其の十一 舌結核、氣管支加答兒、胃擴張、蛔虫……………二三

其の十二 肺結核、腸結核……………二四

其の十三 頸線結核……………二四

其の十四 結核性腹膜炎(慢性)……………二五

其の十五 肺結核……………二五

其の十六 結核性肋膜炎及腹膜炎……………二六

其の十七 結核性肋膜炎(慢性)……………二六

其の十八 肺結核……………二六

第九 結論……………三〇

乙、脚氣血清療法

第一 脚氣の原因及血清の發見……………三三

第二 脚氣は如何なる場合に發病するや……………三五

第三 脚氣は米の中毒にあらざる理由……………三六

第四 脚氣と人種及年齢……………三八

第五 脚氣と職業及誘因……………三九

第六 脚氣の症狀……………四〇

第七 余の脚氣研究……………四一

第八 乳兒脚氣……………四二

第九 脚氣血清注射回数……………四三

第十 脚氣と飲食物并に轉地……………四三

目次終

第十一	脚氣血清は如何に有効なりや	.....	四
第十二	脚氣血清量及反應	.....	四
第十三	治療實驗例	.....	四
例一	.....	望	七
例二	.....	望	八
例三	.....	望	九
例四	.....	望	十
例五	.....	望	十一
例六	.....	望	十二
第十四	結論	.....	五

# 最新結核及脚氣血清療法説明書

共愛病院長 長 又 義 雅 述

## 甲、結核血清療法

### 第一 結核菌及結核體質

結核並に結核性疾病は、諸多の臓器に變化を來すもので、就中肺結核、腸結核、咽頭結核、喉頭結核、腎臟結核、膀胱結核、結核性腦膜炎、全身粟粒結核、結核性腹膜炎、結核性肋膜炎及び心囊炎、淋巴腺結核等は、其主なるものであるが、其他身体何れの部分を問はず、現はれることのあるもの

るもので、其害毒の如何に恐るべきものなるかは、余の説明する迄もなく、世人の既に普く知れる所である。

此の恐るべき結核菌は、多少の差こそあれ、何れの場所にも存在するのであるから、如何に豫防しても、全く之を避け得るものとは限らない。従て、病毒に感染するの憂を全く絶ち得るものでない。若し不幸にして、此病に侵されながら、其治療の時機を逸したならば、容易に回復し得ざることになる。恐るべき結核と雖も、其初期に於て適當なる診断治療を受ければ、必ずや全治するのであるが、其初期に於て能く之を感知し、醫師の診療を受くることが中々むつかしいのである。

日常吾々が多く遭遇する結核起始の状態は、所謂潜進性を以て、徐々に來るものであつて、初めは神經衰弱とか、慢性胃腸加答兒とか、其

他リヤウマチス性筋痛、漸進性貧血等の病狀を以て起り、肺に關する自覺的症狀は無いものであるが、一定の時期を経過すると、本病に關する自覺症狀を發するに至るもので、此の時期になれば、本病の診断は容易となるのである。時には從來何等病的の變狀なくして、風邪の爲め發熱し、頭痛、食慾缺乏等を以て、急に始まるものもあれば、又從來健全なりしものが、俄に咯血を來し、本病の初徴を現はすこともある。而して此の結核に犯されるのは、其人生來の體質にも關係するのである。

結核に犯され易き體質は、骨格細く、皮膚は蒼白菲薄にして、首が長く、翼狀肩胛骨、痲痺胸等肺勞質である。又痔瘻とか「マイレキ」等のある者も、其組合内で、結核に犯され易いものである。然るに此の肺勞質を帯びず、胸廓は廣大にして短く、一見強剛に觀ゆるものでも、詳

細に検査すると、胸廓前後の直徑が左右の直徑に比し著しく短く、又鎖骨上窩が著しく陥没し、又皮膚は蒼白とならず、且の貧血でなくとも、何となく汚氣なる暗帯黄色を呈して、一見頑強なる体格の人でも、略血を以て始まることもあるが、要するに腺病質にして、頸部、淋巴腺、腫張し、扁桃腺肥大し、咽頭の慢性炎症、慢性鼻加答兒、鼻中隔彎曲、興奮し易き神経状態を有し、小咳頑固にして時々發汗し、又事物に刺戟せられ易く、容易に倦怠を來し、食思の佳良なるに拘はらず、体量増加せず、睡眠不定なるに至れば、太に本病の存在を疑はねばならない。

## 第二 結核の豫防

結核を豫防するには血清注射を行ひ、結核に罹らぬ體質にするのが第一であるが、普通の豫防としては、適當なる滋養物を取り、空氣の

新鮮なる處を選び、運動を怠らぬは、行にするのである。又肺病患者があれば、互に傳染せざるよう注意し、一定の痰壺中に、石炭酸水とか昇汞水のような消毒薬を入れて置くか、又は石灰一分と水十分を混じて入れて置き、其内に痰を吐かすようにするか、又他の一つの法は痰壺中に、洗濯曹達一握りを入れ、之れに熱湯を注ぎ、一時間後に、此の痰壺を熱湯を以て、能く洗ふのである。之れ等の實行は自分の爲めのみでなく、公衆の爲めである。而して結核患者は公徳心を缺いてはならない、家族に傳染せぬように、室内には常に痰壺を置き、痰は一滴一沫だも洩れないように注意せねばならぬ。自分で結核なることを知りながら、場所を選ばず、痰をするとか、盃を他人にさすとか、云ふような人は、公徳心のない者である。若し病者が幼少であるか、又病者が結核なることを知らざる時に、家族の者が、失れ丈の注意

を拂はねばならない。殊に病人に使用する食器の類は、家族と断然區別すべきものである。被服、襯衣の類は、蒸氣消毒が第一である。又病人は隔離するのが必要である。歐米二三の都府では、痰の取締りをする法令があつて、夫れは日本で立小便を取締ると同様、犯す者は罰すると云ふことである。其外肺病患者が住居した家屋には、其病菌が残つて居て、傳染することがあるから、其家に移る時は、一日前に、其家の戸障子を取り外し、充分に光線を入れ、戸障子疊類は、一日間炎天に於て、日光消毒をなし、又は石炭酸水や、昇汞水で消毒して、差支なきものは、之れを行ふことが肝要である。又寝具とか、紙幣とか、碁石とか帳簿の類、并に電車の吊り革とか、宴席の盃等、にても傳染することがある。尙飲食物中に結核菌を含有して居つて、傳染することが頗る多い、殊に注意すべきは結核牛より搾り取つた牛乳で、消毒が

不完全なる爲め、飲用者に傳染することが少くない。其外結核者の使用せる筆、鉛筆等を嘗めることや、又結核者と交接すること等、傳染する場合は、數知れず澤山あるから、充分に注意せなければならぬ。其結核病原菌は、眼に見えないもので、空氣中に飛散し、種々のものに附着して居つて、吾々は結核菌で取り巻かれて居るのであるから、如何に注意しても、知らず知らず傳染する場合がある。故に絶体的豫防法としては、薄弱なる體質の者は、勿論のこと、健康者でも、血清注射に依り、免疫を置くことが安心である。

### 第三 結核は全治するや否や

結核に罹る時は、自ら豫後を不良と定め、服薬もせず、不養生をするものがあるが、之れは大なる間違で、醫學の進歩したる今日、結核患者



でも全治する者が澤山ある。初期のものであれば適當なる治療と攝生によつて、必ず全治するから、心配する必要はない、心配は患者の大敵で、非常に害がある、以下之れに就て、少しく述べやうと思ふ。

心配すると、腦に充血し、頭痛を來し、胃の働きを鈍くし、消化不良を來し、全身に衰弱を來すこと、なる、小供が病氣の早く治するは心配をしないからである。何の病でも患者がよくするのには不利益であるから、病人は病氣を醫者に預けて置いて、自分には病氣は無いと云ふ考へを以て、醫師の言を確實に實行するのが一番である。神經作用と云ふものは、實に恐るべきもので、昔し一人の罪人があつて、此の罪人を十字架に手足をくくり付け、目かくしをして桶に水を入れたるものを兩手の下に置き、水の滴々したる様の仕掛となし置き、其の罪人の十指の頭を針にて刺し側で、そら血が出るほら

落ちると云ひ、其水の滴る音を聞かせ、はや血が何外出た、今何外出たれば死ぬるのであると云ふと、實際血液は一滴も出なくても、其の罪人は全く死んでしまつたと云ふことがある。之れは神經的に其生命を失ふことが出來たのである。又人が梅の話を知りたり、又他人の其れを食するのを見る時は、必ず口内に酸水が湧き出るのも、又今此の記事を読むでさへ口の酸くなるのも、矢張り神經的である。食せざるに酸き理由はないが、酸いと思ふから、酸くなるのである。酒吞が酒家の前に行くと、唾液が分泌するのも同じ理である、又余が陸軍に居る時に病室を見廻ると、一人の病兵が頻りに吐て居るからして、尋ねて見ると、一週間前より吐く爲め湯水さへ吞むことが出來ないと云ふ。夫れで係りの軍醫は、吐きの止まる藥劑二品を與へたのに、之れを吞むも矢張り直ちに吐ひて、其の効がなく、只苦むばかりで有

つた、此の病兵に向て、夫れは神経的のものであると、梅の話や種々の例を擧げて、能くよく説明して、薬を吞ましたら、妙なるかな、吐くことが止まり、此の時より、食事も出来速に治したのである。其外牛乳を吞むと吐くとか、何とか云ふが如きも、皆神経的のものであるから、吐くも吐かぬも、其人の心の持ち方如何によるものである。之れ等は皆神経療法である。其外種々のことが、豫後に關係するから、神経を起し、神経的自殺をせない様に注意するが肝要である。

#### 第四 結核の療法

結核の治療薬は、數知れぬ程澤山あるが、全治の目的を達するものは血清療法の外にない。血清療法が結核に對し、最有効なるとは、今日醫界の一般に認むる處であるが、在來の血清が未だ顯著なる功驗

を發揮するを得なかつたのは、其血清が不完全であつたからである。現今結核注射薬が種々あるが、之れ等は結核菌一種を基礎として、製出せられたるもの、ようである、余の使用する血清は、二種の菌より成るもので、結核菌と他の一種の細菌より製出せるものである。蓋し結核なるものは、結核菌其もの、みで發病するもので、無く、結核菌と他の菌とが共同して働くもので、結核は混合傳染病である。結核菌の他の一種の細菌は、連鎖狀球菌で、化膿の性質なく、毒素を菌体外に排出し、結核菌は毒素を菌体外に排出せず、純培養の結核菌を試験するに當り、或る場合は動物に、結核を感受せしめ能はざることあり、此の場合に連鎖狀球菌を働かせば、必ず疾病を來すのである。然しながら結核菌は毒素を菌体外に排出するものでないから、此の菌は獨立して疾病を起すことを得ないと云ふ新しき學理で、此の二種の

菌の毒素を動物体を籍りて製出せるもので、結核並に結核性疾病に對して、今日之れ以上のものは無いと信するのである。

### 第五 結核血清は何回注射すれば

足るや

血清を注射すると、其局部は發赤腫張し、稍々搔痒を來す、之れを反應と云ひ、此の反應が發出すれば、基礎免疫が成立せるものである。

反應が發出する迄の注射回数は、人に依て異なるもので、二三回の注射にて、反應の現はるゝものもあれば、二十回の注射にても、反應不完全のものもある。生來の結核質の多き人程、多量に血清を要するが、多くの場合は五六回にて、反應を來すもので、二十回以上で反應を來さざるものは、極めて稀れである。

### 第六 結核免疫とは何か

此の免疫と云ふことは、例へて云へば、種痘をして天然痘に罹らないう性質の身体になるのと同様である。又他のことで例へて見れば、紙は雨が加、れば破るゝ性質なるも、之れに油を引けば、雨具ともなる、之れ即ち紙が雨の爲めに破れざる様に、油を以て免疫されたのである。結核血清を使用すれば、結核を免疫することを得るのである。

結核に罹り居るものに、血清を使用すれば、疾病は増進せざる様になり、輕症結核は必ず全治するのである。重症結核にして豫後不良と診定せるものと雖も、此の血清にて全治せるもの多く、血清注射を施せば、患者は必ず精神爽快を覺へ、食慾振ひ、佳徴に向ふのである。余は明治三十四年以來醫業に従事し居るが、之れ以上有効なるもの

は他に無いと断言する。

又普通結核性疾患と思はれざるもの例へば慢性氣管支加答兒神經衰弱、小兒の營養不良にして、常に胃腸を害し、寒胃し易き腺病質のものに、此の血清を使用して、良結果を認むることが多い。之れ等の疾病が普通の療法で全治しないのは、其人に生來の結核質があつて、薄弱なる體質であるからである。然るに血清を以て免疫すると、結核質が消失するから、夫れ丈け全身が健康となる爲め、治し難き疾病も全治する様になるのである。例へて見れば、鐵瓶の周圍に澤山水を置いて煮立て、もなかなか煮立たないが、此の氷を除けば、直ちに煮立つのと同じ理である。

## 第七 慢性肋膜炎腹膜炎等に對す

### る血清の効力

慢性肋膜炎とか、腹膜炎などは、皆結核性のものである。之れ等の疾病に向ては、血清療法は實に驚くべき程有効であつて、其の初期に於て之を用ゆれば、速に全治するは、疑なき所であつて、之に依て、幾多の肺病を未然に防止することが出来る。此血清療法は、國民の健康に對する無二の福音である。

結核治療免疫血清實驗報告は、東京順天堂醫事研究會雜誌を以て、醫界にも報告してあり、又結核一般に就ては、廣島中國新聞、埼玉日日新聞等に掲載せられたることもあり、又衛生大鑑と云ふ書物にもある。尤も其記事は、小久保博士の名になつて居るが、其れは誤りで、實は小久保病院に於て余の述べたものである。

## 第八 治療實例

以下本血清療法の發明以來數千人の結核患者に應用して、親しく實驗したる事例に就き、其成績の一斑を擧示し、其効力の如何に卓越なるかを明にしようと思ふ。

### 其一 結核性腹膜炎

村上某女 二十五才

療法 對症的療法の外、結核免疫治療血清三十三回注射に依り全治し、疾病前より肥滿し、余を生命の親と云ひつゝあり。

此の患者は十ヶ年前、左側肋膜炎を患ひ、數週にて全治す。其後異常なかりしが、約一ヶ年前より、腹部に疼痛を覺え、食慾不振、便通不正、時々發熱し、腹部膨滿等の症狀あり、數名の開業醫の治療を受くるも、

更に効なく、妊娠分娩月より尙多く、腹部膨滿し、室内の運動さへ自由ならず、主治醫の勧めに依り、大學其他二三の博士の診を受くるも、皆手を下すものなくして、死を待つばかりなりしが、偶余の注射療法を他人に勧められ、余の診を乞ふ。診するに全治の見込立たざるを以て、一應治療を斷りしも、他に方法なきを以て、是非血清療法を施し、れとの熱望に依り治療せしに、約三ヶ月にして全治せしものなり。

### 其二 急性結核性腹膜炎及び肋膜炎

加藤某女 二十五才

療法 對症的療法の外、血清七回の注射に依り、二週日にして全治す。

此の患者は急に發熱腹痛を來し、三日目より腹部膨滿疼痛、次で左側、次で右側肋膜炎を來す、主治醫は余にして他の二名の醫師と毎日對診せり、他の醫師の云はるゝには、全治の見込なし、萬ヶ一幸に治す

と雖も、一ヶ年を要すと云はれたるものが、二週日にして全治せるものにして、爾來余を信すること甚だし。

### 其三 結核性腹膜炎(慢性)

若林某男 四十四才

療法 對症的療法の外、血清三十回注射に依り全治す。

此の患者は銀行員にして、三ヶ月前より發病し、三名の醫師毎日對診加療するも、其効なく、其内一名の醫師は、患者と親戚の關係あり、此の醫師自ら余の宅を訪ひて、來診を求め、若し見込あらば血清療法を施しくれとのことにより、直ちに同行診察し、血清より他に方法なきものとし、直ちに注射療法を施したるに、一ヶ月余にして全治せり。

### 其四 肺結核

笠原某男 二十二才

療法 對症的療法の外、血清九回注射に依り全治す。

此の患者は第十四師團入營中、發病除隊せられたるものなり。全身頗る衰弱し、咳嗽呼吸困難甚だし。診するに左肺の殆んど全部并に右肺半上部に異常ありて、全治の見込なかりしが、希望に依り、注射療法を施したるに、驚く可き効を奏し、其後五ヶ年を経過するも、尙ほ健康を保持せり。

### 其五 肺尖加答兒

富田某男 四十四才

療法 對症的療法の外、血清七回注射して全治す。

此の患者は前橋市の某病院に一ヶ月余、東京の専門病院に三ヶ月間入院加療せるも、尙時々發熱咳嗽等あり、其効なかりしものにして、余の血清療法にて全治し、爾來三ヶ年を経過せるが、毎年二回位余の

診察所に来り、健康診断を乞ふ。

其六 肺結核

内田 某 男 二十三才

療法 對症的療法の外、血清五回の注射に依り全治す。

此の患者は師範學校卒業の小學教員にして、校醫の診断に依り、休職となりしものなり、余の治療を受けたる後三ヶ年を経過せるが、一般の營養一變し、非常に強壯となれり。

其七 結核性肋膜炎

某陸軍々醫監の令嬢九才

療法 對症的療法の外、血清九回注射せるに、發熱止み、三週余日にして全治す。

此の患者の母は結核に斃る、其後數週にして其令嬢惡寒を以て發

熱す、閣下某軍醫正外二名の醫學士診察するも全治せざりしが、余の血清療法に依り全治せり。

其八 肺結核

某 海 軍 中 將

此患者は某博士の診断に依り、永くとも半ヶ年を保つまじと診定せられたるものなるが、血清療法に依り爾來三ヶ年余の生命を保續せり

尙ほ此の外に同一様の例あり、夫れは長島某男にして、某博士の診断にて、三ヶ月を保つこと能はずと云はれたるものが、血清療法に依り三ヶ年余の生命を保續せり。

其九 膿結核、右肺尖加答兒

田 中 某 女 三十三才

此患者は對症的療法の外、血清注射六回せしに、四ヶ月間に病的諸病狀去り、全身筋肉肥滿し、結核菌は消失し、全く健康体となれり。

其十 肺結核

石崎 某 男 三十二才

療法 對症的療法の外、血清十五回注射せり。

此患者は時々咯血咳嗽咯痰發熱等あり、又胸部に疼痛ありて安眠を缺くこと多し。体格は尋常、營養は不良にして、脈九十至なりし、血清療法に依り、諸症狀大に佳良となり、吳市に於て某軍醫監の診を受くるに、其病的なることを發見すること能はずと云はれたるに依り、生命保險會社に申込みたる處、容易く合格したりと云ふ。然し乍ら咯血止まざるに依り、驅梅療法を施したるに、其効を奏したるか、其後咯血を見ざりしも、結核菌は消失せず。

其十一 舌結核、氣管支カタル、胃擴張、蛔虫

藤本 某 女 三十五才

療法 對症的療法の外、六回血清注射を施し、結核菌消失全治せり。

此の患者は第三回目の注射より、大に精神の爽快を覺ゆ、咳嗽止み、發熱去り、夫れより舌の潰瘍漸次縮小せり、中途にして子宮出血あり、婦人科病院に入院したる爲め、永く診察せざりしも、其後來院し、診察するに、只貧血を残すのみにて、舌潰瘍全治せり。(舌結核は甚だ少き例なり)

其十二 肺結核、腸結核

小田 某 男 二十三才

療法 對症的療法の外、血清十四回注射にて結核菌消失全治す。

此の患者は一年志願兵として入營せるも、肺結核の診斷を受け、除



隊せられたるものなり、八ヶ月間の治療を要し、一般營養佳良となり、某新聞社の支局長の職にありしものなり。

其十三 頸腺結核と診定せしも、分泌物又は其部の組織の結核菌有無は検査せず

原田 某 女 十一才

療法 對症的療法の外、血清二十八回注射全治す。

此の患者は某代議士の親戚にして、同氏よりの依頼に依り治療せしものなり。診するに兩頸側及び頸前は殆んど潰瘍面と其分泌物とにて、不潔にして臭氣あり。其外胸骨上端頸下兩耳後部に至り潰瘍面ありたるに、二ヶ月余にして全治せり。

其十四 結核性腹膜炎(慢性)

清水 某 男 九才

療法 對症的療法の外、血清六回にて全治す。

此の患者の父は清國人、母は日本人なり、患者は初め貧血を來し、漸次衰弱し、時々發熱し、下痢、胃痛、腹痛、食慾不振、腹部膨滿等を以て、某醫の治療を百余日受くる其効なく、他の醫の治を受くる亦効なく、其他二三の醫師の治療を受くるも、腹部は漸次膨大し更に其効なく、依て血清注射を希望し來れるものなり。

其十五 肺結核

藤井 某 男 二十二才

療法 對症的療法の外、血清療法十四回施行す。

此の患者は三ヶ月半の治療にて、結核菌消失し、体量十二貫五百二十目ものが、退院時は十四貫五百六十目となれり。

其十六 結核性肋膜炎及び腹膜炎

療法 對症的療法の外、十二回の血清注射に依り全治せり。

佐々木某女 二十五才

此の患者は初診時より十日間位は豫後不良と定め、附添人にも豫知し置きたるも、漸次佳良となり、体温尋常となり、盜汗去り、食慾振ひ、腹痛去り、腹部縮小し、健康体に復し、歸宅せしに、其親屬近隣の者より、佛が化けて來たと云はれつゝ、ありと患者より言ひ越せり。

其十七 結核性肋膜炎(慢性)

長岡某女 二十七才

療法 對症的療法の外、二十八日間に血清六回注射にて全治せり。

其十八 咯痰中に結核菌陰性なるも、肺結核と診

定せり

池田某男 二十才

療法 對症的療法の外、十回血清療法を行ふ。

此の患者は初めは結核菌陰性なりしも、後は陽性となり治療の結果体温下降佳良なりしも都合に依り中途退院せるものなり。

以上十八例は、余が三千百余人の結核患者と、結核性疾病とに血清の使用を實驗したるもの、中より報告するに適當なる例と信じ採萃せるものであるが、此他の治療成績にも之れと大同小異なるものが少くない、元來余は結核性體質で又余の妻も同體質であるから豫防免疫の目的を以て注射せしに、余も妻も三回の注射にて反應を來し、又余の友人醫師某氏は結核體質(診察はせざるも時々咯血ありしに依り結核なりしならん)で貧血にして筋肉削瘦し、時々下痢頭痛等あり、寒胃し易いので、血清して免疫したるに、四ヶ月の後には全

く健康体となり、体量一貫二百目増加し其後咯血なし。又中學生にして三年前より神経衰弱症の病名の下に、常に休學し居る黒川某なるものを免疫せるに、三ヶ年の永き神経衰弱症も、三ヶ月の後に健康体となつた。

醫師時政省三氏は、此の結核治療免疫血清を自体に實驗し、東京順天堂醫事研究會雜誌を以て、其成績を報告せられたが、其大要を記載せば、左の如し。

毎日午後三時迄は三十八度の輕熱なれども、漸次上昇して、午後六時乃至七時に至るときは、三十九度七分乃至四十度の發熱を來し、毎日型の如く、此の症狀を反覆するを以て、日々瘦羸倦怠を覺え、執務を廢するの不得止に至れり。自ら考ふるに、或は腸

チブスにはあらざるかと、依て清涼劑を用ひ居たり。時恰も父死亡の打電に接し、二十有餘里の旅程を強て歸國し、友人に其病歴を語りて、診斷を受けしに、腸チブスにはあらずと、沈黙して意見を吐露せざりしが、後日考ふるに、氏は肺尖加答兒なることを知りたるも、余の驚愕を恐れ、云はざりしものならん。翌日更に某醫學士の診を受けしに、肺尖加答兒と診定せられ、爾來數月間業務を廢し、靜養せよと命せらる、日々靜養怠らざるも其甲斐なく、盜汗咳嗽併發し、毎日反覆する消耗熱に苦めらる、や甚だし。此に於て、血清療法の有効なるを聞き、其血清療法を受く。第一回注射日は、身体動搖の爲めか、發熱著しく、氷巻法に由て、僅に安眠を得たり。然るに翌日は、一般症狀稍々輕快を覺え、午後六時檢温するに、三十七度なり。爾來隔日に血清注射療法を受け、五

回に至り、少しく反應あり、夫れより全身症狀大に輕快し、熱全く去れり。如何に血清が有効なりとも、斯く奏効速なるは、余を疑はしめたり。

## 第九 結 論

以上の實驗により、左の結論に到達するのである。

- (一) 結核治療免疫血清は、結核并に結核性疾病に對し、有効無害なること、特に結核の初期、結核性肋膜炎、結核性腹膜炎に對し、効力確實にして、他に之に優る治法なきこと。
- (二) 結核治療免疫血清は、重症患者にして、豫後不良と診定せられたるものにて、之を使用せば、精神爽快を覺へ、大に佳徴を呈すること。

(三) 血清反應は不快なるものにあらず、通常二三日にして、消散すること。

(四) 右の血清を、健康体に使用すれば、結核を豫防し得ること。

(五) 基礎免疫の成立する血清量は一定せずして、一回の注射にても反應を現出することもあり、又稀には二十回を過ぐるも反應不完全なるものもあれど、多くは六七回にて反應を見るを常とす。

(六) 小兒に使用する血清量は、大人に比し、比較的少量を要す、其理由は小兒にして結核性疾病を來すが如き者には、其れ丈け多くの結核性體質を、生來保持するが爲めなること。

## 結核血清療法 完

# 乙、脚氣血清療法

## 第一 脚氣の原因及血清の發見

脚氣の原因に就ては、古來種々の説が行はれて居るが、多くは之を東洋人の食物に歸して居る。則ちゲルブケ氏は貯藏不完全の陳舊なる米穀を喰うによりて起ると云ひ、神ドクトルは、一定の地方に於て産する米に、其原因を歸し、エークマン及フォルテルマン両氏は、白米を以て、本病の原因となし、又た三浦氏は、青魚の肉に、其原因を求め、クリム氏は、或る魚類の生肉を食するによりて、本病は發すと論じ、諸説紛々として、定まる處なきは、實に我醫界の恨事なりと云はねばならぬ。然るに脚氣が陰鬱濕潤なる夏季に於て多く發し、又一定の地の

地方に限局して流行性に現れ、從來本病の有らざりし地方にも、交通が頻繁になると、土民の食物が從來と變らざるに拘らず、本病の侵襲を被り、俄然多くの本患者を發生するに至るが如き事實あるに徴すれば、本病も亦一種の細菌に由りて起る處の傳染病なることを察するに足るのであらう。

小久保博士は、本病に就て、深く研究せられ、先づ一種の重球菌を發見して、之れを脚氣の原因菌と認め、陸軍々醫學會雜誌に報告せられ、其後益々研究を重ねて、更に一種の短少なる桿菌を發見し、此の桿菌を陽性菌となし、先きに發見したる重球菌を陰性菌と名け、脚氣病は此の二種の細菌の共働に由る混合傳染性自家中毒なりと説き、而して其毒素を解消せんが爲めに、免疫方法を考案し、治療免疫血清を製出して、脚氣毒素の試験を重ね、此血清を以て、其毒素の働きを無力ならしむることを動物試験上確認されたのである。

## 第二 脚氣は如何なる場合に發病するや

脚氣は混合傳染病で、二種の細菌の共働によつて發病することは、前述の如くであつて、脚氣菌は空氣中何れの場所にも散在し、又多くの人身中に存在して居るが、二種の細菌が共働するに至らざる間は、脚氣は發病しないのであつて、其發病を助くるものは、要するに人体の急性衰弱である。軍人の行軍後に於て、若しくは戰爭後に於て、婦人の分娩後に於て、青年の膝下を離れ都會の地に勉強せる後に於て、脚氣を發する者多きは、是等の者が、嘗て脚氣に罹りたることなきに拘らず、既に脚氣の細菌が身体中に潜んで居たからで、前記の場合に

は、急性衰弱の爲め、脚氣症狀を現はしたものである。而して夏期に於て、脚氣の多く發病するのは、脚氣菌の働くに都合よき温度と、身体の衰弱し居るとに由るのである。又た毎年甚だしく夏瘦の癖ある者は、脚氣潜伏の疑あるもので、乳兒の夏期に至り、青便、吐乳、不安等を見るものは、其母が潜伏性の脚氣を有するの疑あるものである。

### 第三 脚氣は米の中毒にあらざる

#### 理由

(一) 米の中毒に由て、脚氣を發病するものとせば、米を常食とする日本人にありては、高齢の者ほど、脚氣患者の多かるべき譯なるに、事實は然らず、反て脚氣は中年者に多きこと。或は老年の者には、一方に中毒すべき事由が加はるに拘らず、他方に於て、其中毒に慣れ、之に對

抗する力が加はる爲め、脚氣が老年者に少いのであらうと云ふ者があるかも知れないが、例へば二十歳に至り、脚氣を發したる者が、翌年は無病にて過ぎ、更に二三年を経て再び發病すると云ふが如き事實は、到底米の中毒説によりて解釋し得ざる現象なりと云はざるを得ない。

(二) 山間、海濱等にて、今日迄脚氣患者の絶無なりし地方でも、交通の便開けて、他地方人の來往あるに至るや、遽に脚氣患者の多數發生するを見るに至るが如きは、之れ脚氣菌を他より輸入したからである。

(三) 常に麥食をなす者に於ても、脚氣を發す事實あること、余は山間の農家に生れたが、隣家に、米食を忌み、麥のみを常食とする宮下某と云ふ中老婦があつて、祝吊の典儀などにて他家に招かれる場合には、必ず自家より麥飯を握り飯として携へ行くを例として居たが、余の

十四歳の時此婦人は脚氣に罹りて死亡せる事實を見た。脚氣は米の中毒なりと主張する學者にして、尙脚氣患者に米食を與へつゝ、あるは屢見る處の事實であるが、脚氣にして果して米の中毒なりとせば、是れ中毒の上に中毒を重ねるものではない乎。

(三) 余は動物を麥、小豆、水のみを以て七ヶ月間養ひ、之に脚氣毒素を注射して見ると、此動物は衝心状態を以て、二時間と二十分後に於て斃れた。脚氣の原因が米の中毒以外に在ることは、之を以て證するこゝとが出来る。

#### 第四 脚氣と人種及年齢

脚氣は人種によりて、其發生に多少あり、歐洲人は本病に冒さるゝこと比較的稀有で、黄色及黑色人種には、本病を患ふる者が多い。年

齡によりても、亦多少ありて、十五歳乃至三十歳の男子は、本病の侵襲を被ること最も多く、老人小兒には稀れである。

#### 第五 脚氣と職業及誘因

本病に最も多く冒さるゝものは、兵士及囚人である。其他居常座食し、運動不足なるもの、例へば教師、學生、僧侶、著述家、彫刻師等には本病に罹る者が多い。而して寒胃、沾濕、心身の過勞、憂慮、焦心、悲歎、牛飲馬食、營養不及、低濕地に於ける勞働、狹隘不潔にして換氣不十分なる住屋、房事過度、妊娠、産褥、授乳等の如き、何れも本病を誘發する原因である。又た腸チブス、赤痢、梅毒、マラリヤ、肺勞、半身不隨症、脊髓炎、肋膜炎、癌腫等には、往々本病を併發する憂ひがある。



## 第六 脚氣の症状

本病固有の症状は、脚部殊に下腿に、倦怠を覺ゆることで、歩行に當り、容易に疲労し、腓腸筋が緊張し、時としては、疼痛を發することがある。患者は頭重、口渴を訴へ、容易に發汗し、且つ脚部、手指并に口の圍りに知覺の異常を來たし、之に伴ふて下腿に浮腫を生じ、又た知覺に障害あり、是等の症状は時としては下腹部に發し、又稀には眼瞼耳殼に現はれ、尙ほ重症の脚氣になると、心悸亢進、心窩苦悶、食氣缺乏等の症状あり、且つ下肢及び全身に浮腫を生ずるのである。

脚氣には、神經性症、萎縮性症、水腫性症、急性、亞急性又は心臟性症等の區別がある。就中、脚氣衝心は最も恐るべきもので、好んで少壯強剛の者を襲ひ、患者は、心悸亢進、心窩苦悶、呼吸促迫等に惱まされ、多くは

之に加ふるに体温昇騰し、或は吃逆あり、遂に心臟麻痺して斃れるのである。

## 第七 余の脚氣研究

余は明治三十五年より今日に至る迄脚氣を研究したが、其の結果

(一) 慢性脚氣患者の多くは、足蹠に一種不明の硬結を發生すること、

(二) 脚氣毒素を有し居るものは、時としては認むべき脚氣症状なくして、非常に頭痛を來すことあること、(三) 脚氣毒素の爲めに、神經衰弱症を來たすことあること、(四) 普通の脚氣症状なくして、胃腸の障害及び皮膚の色は一種特異の紫青色を、特に四肢に現はすことあること、又(五) 惡疫質狀の土色を以て、何となく全身に衰弱を現はし、脚氣の症状なくして、食慾不振、全身倦怠、便秘、夏瘦を來すこと等が、其主

なる症状なることを認知した。

余は多年の研究中普通世間に用ひられる脚氣治療薬に就ても種々實驗を重ねて見たが、信ずるに足るものが無かつた。然るに小久保博士の發見せる脚氣血清は、其効力卓越にして、既に之を四千餘人の脚氣患者に使用し、其成績に徴し、脚氣の療法として、他に優るものなきを確信するに至つた。

## 第八 乳兒脚氣

妊娠中若しくは産後に於て、母親が脚氣に罹るときは、縱令其脚氣が、尙潜伏期中に在りて、母体に脚氣の自覺なき時も、其哺乳によりて、乳兒に脚氣を起すことがある。其症状は、吐乳、不安、青便、下痢等である。此の乳兒脚氣は、母体に血清療法を施すと、授乳を廢すると否と

を問はず、母兒共に全治するものである。

## 第九 脚氣血清注射回数

脚氣血清は、病の輕重を問はず、多くは一回の注射を以て足るのである。此一回の注射にて、注射の局部は、稍赤色を呈し、搔痒を覺へる。之れが反應である。此反應が多ければ多き程、脚氣毒素を多く解消し去るのであるが、若し一回の注射にて反應が発生せず、更に一回注射を要することがある。其れでも尙反應現はれざれば、更に第三回目の注射を行ふこともあるが、多くの場合は、一二回の注射にて足るのである。

## 第十 脚氣と飲食物并に轉地

脚氣患者は一般に麥食小豆等を用ゆるを常とするが、余の治療法に依れば其必要を認めない。脚氣患者は四肢の筋肉其他身体各部を構成する諸細胞が、脚氣毒素の爲め、半死の状態になつて居るが、脚氣血清を施すと、其細胞は皆毒素を取り除かれ、病因を根絶するが、患者の身体は尙當分衰弱を去らないから、一日も早く之を回復せしむる爲めに、營養を盛にせねばならぬ。故に血清後、余は米食は勿論、牛乳、鶏卵、洋食等を與へる必要こそあれ、麥食小豆等の不消化物を用ゆるの必要を認めない。又轉地は普通の場合に於てこそ必要であれ、血清療法を施せば、脚氣は直に全治するから、其必要が無くなるのである。

### 第十一 脚氣血清は如何に有効な

りや

急性脚氣患者にして、下肢に浮腫あり、心悸亢進、胸内苦悶あり、脈膊は健康体の二倍となりて、百五十餘を算するに至り、衝心せんとするが如きものに、血清療法を施せば、二十四時間に、脈は三十餘を減じ、浮腫及び胞内苦悶去り、衝心することなくして全治するのである。又毎年發病する者でも、一度血清療法を施せば、最早再發することは無い。

尙乳兒の脚氣は、母体に血清療法を施すによりて、母親の病毒を去るのみならず、乳兒も共に全治することは前に述べた通りである。

### 第十二 脚氣血清量及反應

脚氣の血清量は一定せず、五〇にても反應を來すこともあり、又一〇〇にても反應を見ざることもある。若し一〇〇にて反應を來さざる場合は、尙注射量を増加するを要し、反應を現はすに至るを以て度とす、多くの場合は八、七より一〇瓦にて反應を見るのであつて、此反應は、脚氣の毒素が解消した徵表であつて、諸多の症狀は減退するのである。注射の時より反應を來す迄の時間も亦一定せずして、早きは數時間、遅きは二三日若しくは其れ以上の時間にて現はれることがある。此の遅速あるは脚氣毒素量と血清量と、患者の體質及び其營養状態如何に據るが、血清注射の効力たる反應の發生の遅きときは、滋養物を採らしめれば、比較的其効果を早むることが出来る。重症脚氣患者に血清を注射して後二十四時間を経過したるものは、最早死することは無い。

### 第十三 治療實驗例

以下過去に於て余が其治療に従事せる四千余の患者中より數個の實例を擧げて、其成績の一斑を示さうと思ふ。

#### 例一

學生 中島 某 男

此患者は、五年前脚氣に罹り、毎年發病す、常に頭痛あり、記憶力減退不眠等（神經衰弱症狀）あり、冬期と雖も、時々心悸亢進し、下肢に麻痺ありしが、血清療法に依り八日目に全治せり。

#### 例二

貧血數業 鎌田 某 女

分娩前より、下肢に浮腫と共に、知覺異常を來し、漸次全身に及び、分娩後口圍より頭部迄麻痺の感あり。胸内苦悶を來す、某醫學士其他の醫士四名の治療を受くるも、諸症益々増悪す。乳兒には止むを得

す哺乳せしめたるに吐乳青便を漏す。醫士の注意に依り授乳を廢せり。食慾は不振にして、嘔氣あり。便通は下劑の爲め、一日二三行脈搏百二十、体温三八七、心音旺盛、尿量少く、四肢の運動さへ障害せらる。此患者は肥滿し、衝心の恐れあるに依り午後十一時頃往診、血清療法を施したるに、四日目に諸症減退し、乳兒に授乳せしめしに、吐乳青便等なく、其後益々佳良にして、十八日目に於て脚氣諸症全く去れり。

### 例三

學生 宗 像 某 男

此の患者は下肢及び上肢に知覺異常あり、心悸亢進、便秘、浮腫ありしも、血清注射後九日にして、脚氣症狀全く去れり。

### 例四

職工 久 森 某 男

此の患者は三十日前淋疾に罹り、二週餘にして全治す。三日前よ

り突然惡寒を以て發熱し、爾來下肢倦怠痛と共に知覺異常を來し、食慾不振、心悸亢進あり、血清療法せしに七日目にして全治せり。

### 例五

砂糖商 山 崎 某 男

八年前肋膜炎を患ふ、二年前脚氣に罹れり、本年は未だ起らず、一ヶ月前より頭痛あり、殊に七日前自轉車旅行をせしに、頭痛益々強く、昨夜一昨夜の如き、睡眠する能はず、頭部に氷嚢を貼するも其効なく、又右耳の後に疼痛あり、食慾便通には異常なし。潜伏性脚氣と診定し、血清療法を勧めしに之れを嫌ふ爲め、臭剝劑二日分を與へたり、然るに頭痛は毫も減退せざるを以て、遂に血清療法を行ひしに、其夜より頭痛全く去れり。

### 例六

官吏 日 下 部 某 男

此の患者は下肢に麻痺あり、二十日前より、歩行全く不能となり、胸

内に時々苦悶を來す、血清注射せしに、六日目にして歩行完全となれり。

例七

酒造家 兒玉某男

永く軽度の胃カタルあり、五年前より夏期に至ると下肢に中度の浮腫、疼痛、知覺異常を來す。本年も二十五日前より同症狀を來す、又腰痛あり、牽丸稍々腫張す、便通三日に一行食慾不振、体量は十七貫百目なりし、此の患者は第一回の注射に依り反應なく、六日目に第二回の注射せしに、翌日反應あり、第一回の注射より十一日目に至り、脚氣諸症狀全く去れり。

例八

學生 岩崎某男

六年前脚氣に罹り、爾來毎年同症を來すと云ふ、診するに下肢に浮腫、麻痺あり、三日前より上肢口圍に麻痺を來す、脈は百八至、此の患者

は第一回の注射に依り反應少く、第二回の注射せしに、九日目に諸症狀全く去る。

例九

徳丸某男

下肢に浮腫あり、上下肢共に麻痺あり、胸内苦悶、食慾不振等の症狀あり、血清二回せしに、第一回注射日より、二十日間にして全治す。

例十

兒玉某女

十三年前毎夏期又は産後必ず脚氣を來す、三週前分娩す、分娩四日前より、下肢及び指尖に麻痺を來し、胸内苦悶し、心悸亢進し、歩行全く不能なり。此の患者は第一回の注射に依り、反應不完全なりしが、二日目に尙ほ一回注射せしに反應あり。第一回の注射より、十日目にして、脚氣諸症狀全く治す。

例十一

木村某女

十日朝より下肢に知覺異常と浮腫を來し、同日午後五時頃診するに前症狀の外著變なかりしに、同十時頃急に胸内苦悶を來し、下肢倦怠痛強く、嘔吐せり。此の時脈搏百二十、体温三八、九、衝心の恐れあるに依り、同十二時頃血清を注射し、三時間餘を経て診するに、胸内の苦悶大に去り、脈搏百八至となる、翌朝診するに諸症狀大に去り、普通の食事をなせり、十二日には臥床を離る。

#### 例十二

細井某男

此の患者は十五年來、毎年夏期に至ると、脚氣を來し、下肢非常に浮腫麻痺し、胸内苦悶の爲め、少くも一ヶ月位休業せしものなり、之れに血清療法を施したるに、五年餘を経過するも、其後脚氣症狀更に起らず。

### 第十四 結 論

以上記述せる所を約言して、左の數項を斷定することが出来る。

- 一、余の使用する脚氣血清は、純粹の脚氣に對し、有効無害なりしこと。
- 一、脚氣血清は、脚氣を豫防することを得。
- 一、脚氣血清は、初め脈搏呼吸に影響し、胸内苦悶を減じ、脚氣諸症狀漸次輕快す。
- 一、脚氣血清を使用すれば、脚氣は速に治す爲め、轉地等の必要なし。
- 一、脚氣血清を使用すれば、脚氣は速に治す爲め、麥食小豆等を食するの必要なし、反て他の滋養物を胃の許す限り取ること必要なり。
- 一、乳兒脚氣は母体を免疫するに依り、治癒せしむることを得。

以上

28  
612

(54)

脚氣血清療法完



終

大正六年六月十七日印刷  
大正六年六月二十日發行

定價金二十錢

不許複製

編輯者 東京市日本橋區新右衛門町二十番地  
長 又 義 雅  
印刷者 東京市京橋區南大工町八番地  
古田 勘次郎  
印刷所 東京市京橋區南大工町八番地  
製版印刷所

發行所

東京市日本橋區新右衛門町二十番地

共

愛病院

電話本局二六〇一番